

ポートフォリオ

青木麦生



AOKI MUGIO

## 略歴

---

### 青木麦生 | AOKI Mugio

1978年、東京都阿佐ヶ谷生まれ。早稲田大学第二文学部在学中、歌人・水原紫苑の授業を受けたことをきっかけに、短歌創作を始める。

2000年、短歌研究臨時増刊『うたう』にて作品賞佳作。枠野浩一編『かなしーおもちや』(インフォバーン刊、05年)などに短歌を提供する一方、東京都杉並区内の区民掲示板131箇所に自作の短歌を貼り付ける「でんごんくんプロジェクト」(07年)以降、街に短歌を発表する試みを始める。

10年には、カッティングシートで切り抜いた短歌を街に貼った様子を写真に収めた処女歌集『阿佐ヶ谷ドクメンタ』を電子書籍として発表。以降、各地のアートフェスティバルに活動のフィールドを移し、松戸アートラインプロジェクト2011(千葉・松戸市/11年)、黄金町バザール(神奈川・横浜市/12年)、二子玉川青空アート&マート(東京・世田谷区/13年・14年・15年)、B C T I O N(東京・千代田区/14年)、池袋アートギャザリング(東京・豊島区)、SONICART(千葉・幕張/15年)、ホテルアートフェス(パークホテル東京/17年)などで作品を発表。川の護岸や街路樹、公園のベンチなど、街の至る所に自作の短歌をインストールし、街全体を歌集と見立てたサイトスペシフィックな作品を展開している。

URL: <http://aomugio.com/>

## 主なパフォーマンス

---

- 2007年「でんごんくんプロジェクト」(東京・杉並区)
- 2007年「TANKA PRESEPI a GUBBIO」(イタリア・グッビオ市)
- 2010年「阿佐ヶ谷ドクメンタ」(東京・杉並区)
- 2011年「松戸歌壇」(松戸アートラインプロジェクト2011／千葉・松戸市)
- 2012年「黄金町短歌譚」(黄金町バザール2012／神奈川・横浜市)
- 2013～16年「二子玉短歌ストラーダ」(二子玉川青空アート&マート／東京・世田谷区)
- 2014年「ニュー麹町短歌ビル」(BCTION、佐々木あらら氏との共作／東京・千代田区)
- 2015年「元池袋メトロポリ短歌」(池袋アートギャザリング／東京・豊島区)
- 2015年「TANKA SONIC」(SONICART／千葉・幕張)
- 2017年「東京 TKO」(ホテルアートフェス／パークホテル東京)
- 2018～19年「怪盗ランポの挑戦状」(C-DEPOT主催／東京芸術劇場・豊島区)
- 2020年「新しい生活様式のニューノーマルな短歌」  
(C-DEPOT主催 RESURRECTION -その後の世界のアートと社会-/東京・渋谷区)
- 2021年「RANPO WANTED」(C-DEPOT主催／ロサ会館・豊島区)

## メディア

---

- 2000年 短歌研究臨時増刊『うたう』(短歌研究社)／短歌掲載・作品賞佳作
- 2003年 短歌WAVE 2003 winter(北溟社)／短歌掲載
- 2005年 枝野浩一編『かなしえおもちゃ』(インフォバーン)／短歌掲載
- 2012年 現代詩手帖2月号「来るべきうた」(思潮社)／評
- 2012年 日経新聞文化欄(日経新聞社)／寄稿
- 2013年 ナニコレ珍百景(テレビ朝日)／視聴者投稿により「黄金町短歌譚」が紹介
- 2014年 『かんたん短歌の作り方』枝野浩一著(ちくま文庫)／短歌掲載(解説文)
- 2015年 NHK短歌3月号 ジ・セ・ダ・イ・タ・ン・カ／短歌掲載
- 2020年 『仕事本 わたしたちの緊急事態日記』(左右社)／日記寄稿

## 評

---

毛利嘉孝（社会学者・東京藝術大学准教授）

—— 今回の「松戸アートラインプロジェクト 2011」で最も大きな話題を呼んだのは、なんと言っても、公園や街路、ベンチや建物など松戸のいたるところに貼られた青木麦生の短歌の一群である。ユーモラスなものから毒のあるものまで、そのクセのある短歌は、街の風景を一変させた。けれども、会期が進行するとともに、いつの間にか松戸の風景に馴染んでいった。青木は、狭い意味での美術作家ではなく歌人だが、その独特のアプローチによって言葉の力を再認識させたのである。（『松戸アートラインプロジェクト 2011 ドキュメント』より抜粋）

山田航（歌人）

—— この『松戸歌壇』を発表した青木麦生の真意は、身近なところに唐突に歌を置くことで街行く人に短歌の存在を知らしめてやろうという啓蒙精神にあるのだろう。しかし歌人の目から見るとこれは、短歌の「作者」の顔をどこまで消せるかという実験ではないかと思えてくる。短歌はたいていテキストのみでは読まれず、作者の素性などを手がかりに批評される。青木は風景という情報量の多い外部文脈を大胆に取り入れることで、「作者」を消失させた。『松戸歌壇』の短歌は、純粹に風景との関係性のみで鑑賞されることが可能である。それはきっと、未来の短歌への一つの回答だろう。（『現代詩手帖』2012年2月号「来るべきうた」より抜粋）

## 参考作品



上・下 松戸歌壇（2011年／松戸アートライン 2011 参加作品）

## 参考作品



松戸歌壇（2011年／松戸アートライン 2011 参加作品）



黄金町短歌譚（2012年／黄金町バザール 参加作品）



二子玉短歌ストラーダ（2013年／二子玉川商店街青空アート＆マート参加作品）



二子玉短歌ストラーダ（2014年／二子玉川商店街青空アート＆マート参加作品）



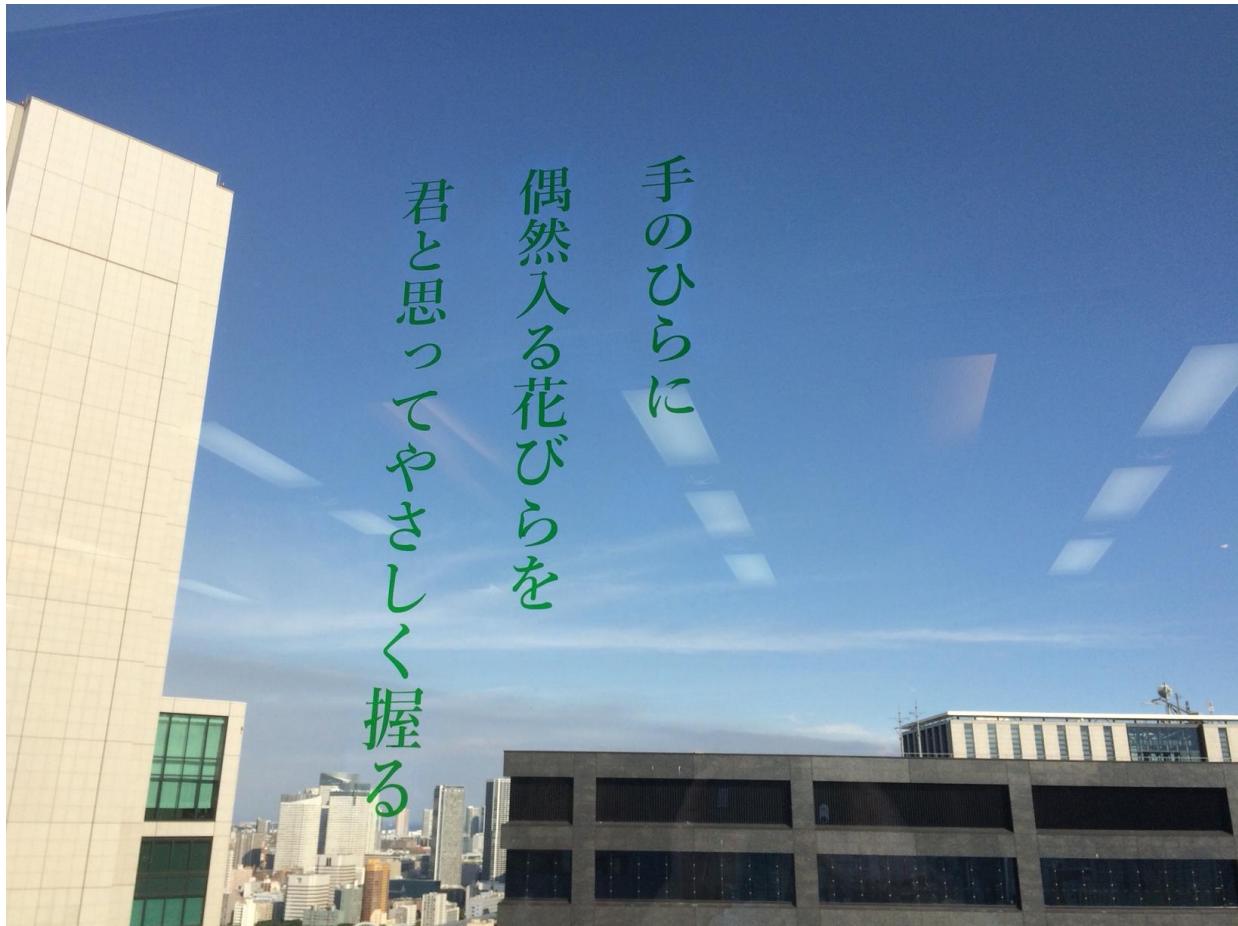
ニュー麹町短歌ビル（2014年／BCTION 参加作品）



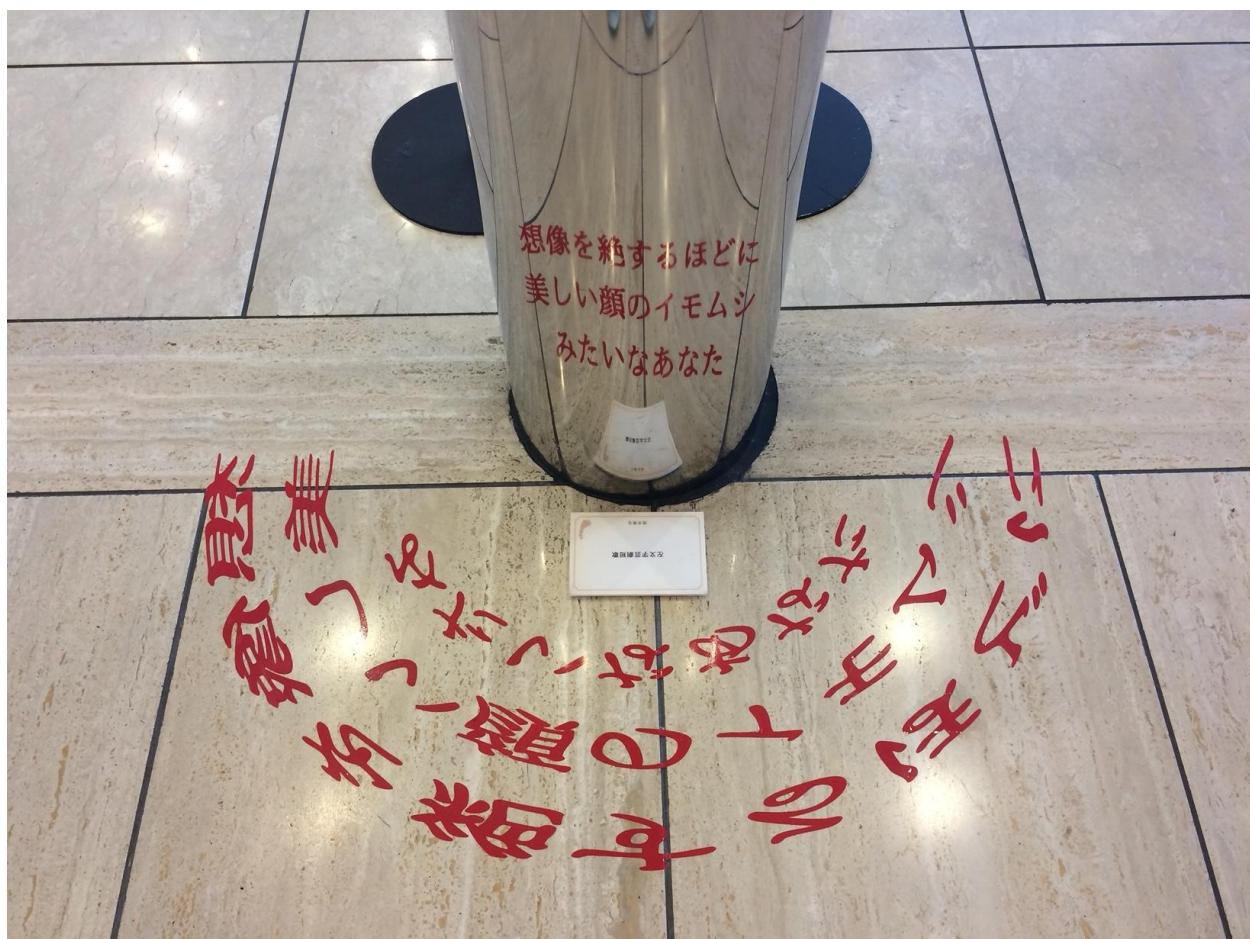
元池袋メトロポリ短歌（2015年／池袋アートギャザリング参加作品）



TANKA SONIC（2015年／SONICART 参加作品）



「東京 TKO」(2017年 ホテルアートフェス／パークホテル東京)



「怪盗ランポの挑戦状」(2018年 C-DEPOT 主催／東京芸術劇場・豊島区)